

様式6（第15条第1項関係）（採択年度＝平成26年度以降）

平成28年 4月 8日

独立行政法人 日本学術振興会理事長 殿	研究機関の設置者の 所在地	〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1	
	研究機関の設置者の 名称	国立大学法人 東京外国語大学	
	代表者の職名・氏名	学長 立石 博高 (記名押印)	
	代表研究機関名 及び機関コード	東京外国語大学	12603

平成27年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2601	補助事業の 完了日	平成28年3月31日	関連研究分野 (分科細目コード)	ヨーロッパ史・アメリカ史(3304)
補助事業名(採択年度)			補助金支出額(別紙のとおり)		
境界地域の歴史的経験の視点から構築する新しいヨーロッパ史概念(平成26年度)			38,437,374 円		
代表研究機関以外の協力機関 なし					
海外の連携機関 ©International Cultural Centre (Krakow, Poland)/Central European University (Budapest, Hungary)/Department of History and Civilization, European University Institute (Firenze, Italy)					
1. 事業実施主体					
フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野	
主担当研究者 篠原 琢 担当研究者 金井 光太郎 千葉 敏之 相馬 保夫 林 佳世子 計5名	東京外国語大学 東京外国語大学 東京外国語大学 東京外国語大学 東京外国語大学	大学院総合国際学研究院 大学院総合国際学研究院 大学院総合国際学研究院 大学院総合国際学研究院 大学院総合国際学研究院	教授 教授 教授 教授 教授・副学長	中央ヨーロッパ近現代史 アメリカ合衆国史 ヨーロッパ中世史 ドイツ現代史 オスマン帝国史	

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先(電話番号、e-mailアドレス)
イノウエ ノリカズ 井上 憲和	研究協力課研究協力係・係員	TEL: 042-330-5593 E-mail: kenkyu-kenkyo@tufs.ac.jp

2. 本年度の実績概要

本年度は事業計画の二年目にあたる。若手研究者の派遣は順調に進んでおり、計画通り1名を国際文化研究所に、2名を中央ヨーロッパ大学に、そして2名を欧州大学院大学に派遣した。年度別には26年度に2名、27年度に5名が派遣され、28年度は3名が27年度に引き続き、連携研究機関での研究を継続する。27年度については、70日間を計画していた巽由樹子講師の二度目の派遣が、健康上の理由から中止となったが、すでに一度目の派遣で研究および研究ネットワークの構築を著しく進展させていたので、事業計画の達成には影響がなかった。招聘については26年度が2名（中央ヨーロッパ大学と欧州大学院大学から各1名）、27年度は計8名が招聘された。派遣研究者、招聘研究者それぞれの研究活動実績については、本実績報告書の第4項から第6項を参照されたい。派遣で特筆すべきは、若手研究者が本研究事業の課題を果たすべく個々の研究を推進したことに加えて、連携機関での長期滞在によって、研究上の国際的ネットワークを構築したことである。国内外で本事業主催の国際会議を開催できたのは、そうした活動の結果である。

本年度は、研究者個々の共同研究からさらに進んで、研究推進上、連携研究機関を相互に結びつける事業が行われるようになった。国内で7回、国外で2回、本事業主催の国際会議、および国際セミナーを開催した。若手研究者、および研究分担者、連携研究者は、国際会議の開催にあわせて研究成果の報告を準備し、また当日の討論を通じて、研究の新たな展開の方向性を見出した。こうした会議の開催によって、機関連携、研究ネットワークの構築は大いに進展した。とりわけ年度末に東京外国語大学で行われた本事業と同名の国際会議「境界地域の歴史的経験から構築する新しいヨーロッパ史概念」は、事業全体の中間的総括として位置づけられ、近現代ヨーロッパ史における自由主義の見直しや、東欧社会主義の過去をヨーロッパ史の概念に有機的に組み込むにあたっての理論的・方法論的な見通しが得られた。会議は、国際文化研究所、中央ヨーロッパ大学から計4名の研究者を迎えて行われたが、これら二つの機関とは相互に国際会議が行われ、連携が非常に緊密になった。欧州大学院大学については、この国際会議の課題の延長線上に、「帝国とナショナリズム」と題する国際会議を開催する計画で、28年度の5月に、ともに19世紀史を中心に研究を進めている歴史・文明学部の学部長ピーター・ジャドソン教授、ルーシー・ライアル教授を招聘する。また幕張で行われたICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）で、本学と中央ヨーロッパ大学の共同でパネルを組織し、国際学術コミュニティに向けて、研究成果を問うことができた。

国外では、国際文化研究所で「内と外から見るヨーロッパ史」（2016年2月）、中央ヨーロッパ大学で「記憶の暴力・暴力の記憶」（2016年3月）という大規模な国際会議を開催することができた。これらの会議では、日本側研究者と連携研究機関の研究者の研究報告を通じて、研究上の相互交流が実現しただけでなく、研究事業計画全体の問題関心を連携研究機関の研究者と共有し、研究ネットワークの拡大・深化をはかることができた。本事業が、日本のヨーロッパ史研究、および広く人文諸科学の研究に貢献するばかりでなく、ヨーロッパ史研究をグローバルな歴史研究に結びつけていくことを目的とするなら、本研究の問題設定、および研究成果を、ヨーロッパの代表的な研究機関で公表し、広く現地研究者と共有することが重要である。国際会議は、派遣中の若手研究者を中心に組織され、若手研究者、現地研究者、そして本研究の研究分担者の報告によって構成された。こうした事業は、日本の西洋史研究のプレゼンスを高めるだけでなく、将来にわたって、研究者のネットワーク構築に貢献することになるだろう。

3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

本研究は、東部ヨーロッパ、および地中海地域を中心とするヨーロッパ境界地域の歴史的経験に焦点を当てながら、共同研究によって新たなヨーロッパ史の概念を構築することを目的として掲げ、従来のヨーロッパ研究の問題点として次の三点をあげた。

1. 目的論的歴史像：ヨーロッパ史の発展は、普遍的な人類史的価値の実現を体現するものとして目的論的に構想されてきた。
2. 国民的学術研究の束：ヨーロッパでは 19 世紀の半ば以降、学術研究、特に人文社会科学は国民国家／国民社会のプロジェクトとして制度化、組織化され、それぞれに精緻な知の体系を築きあげてきた。ヨーロッパ研究は、国民的学知の束として構成された。
3. 東と南の境界地域の排除：ヨーロッパ研究は西欧社会を中心に構想され、東と南の境界地域の経験はヨーロッパ研究に組み込まれることが少なかった。

こうした問題意識に立ちながら、ヨーロッパ史の新しい構想を構築することが本事業の研究目的である。招聘・派遣を軸に国内外での合計 9 回にわたって国際会議・ワークショップを開催したが、それらは個別のテーマを扱いながら、この三点を批判的に検討するという課題を基底にして、計画・実施された。この結果、研究事業の全体像が連携研究機関の研究者にも共有され、研究の積み上げが可能となった。初年度には、主に日本側の研究者と連携研究機関の研究者との個別の交流を基礎に研究協力が行われたが、本年度は研究機関どうしの面的な研究協力が進んだ。特に 3 月に本学で行われた国際会議は、上にあげた課題を正面から取り上げ、理論的・方法論的な見通しを得ることができた。会議では、研究事業全体にかかわる問題提起に続いて、第一部「ヨーロッパ近代におけるリベラリズム再考」、第二部「ヨーロッパにおける文化遺産と歴史意識」というセクションを設定した。第一部では「目的論的歴史像」を支える自由主義的歴史像の再検討を行い、第二部では、現代史における「記憶の政治」の課題を論じた。これらはヨーロッパ史概念の再構築を行おうとする本研究事業の研究面での大きな成果であり、最終年度を前にして、理論的方向性が定まったことの意味は大きい。また、事業目的として、トランスナショナルなヨーロッパ史研究を推進するためのコンソーシアムの形成をあげたが、この会議で連携研究機関 2 機関と本学との総合的な事業が実現したことで、目的に向かって大きな前進が得られた。このように、本年度は「実績概要」に示したように、個別研究の面でも、研究ネットワークの構築の面でも、計画以上の成果をあげることができた。

本年度の各種の国際会議、および若手研究者を中心とする共同研究のなかで、ヨーロッパ史に集中していた国外の連携研究者の研究関心を、グローバル史、および非ヨーロッパ世界との比較史に開いていったことは、本年度の大きな成果であった。本事業は、日本のヨーロッパ史研究者が、ヨーロッパの研究機関と研究協力を進めるものなので、連携研究機関・連携研究者との研究上の関係は、そもそも非対称的である。そのうえで、ヨーロッパ史をグローバルな歴史研究に結びつけるうえで、日本の西洋史研究が持つ比較史的視点の伝統が大きな貢献をなしうるという見通しの下に本事業は構想されたが、本年度は大きな成果を上げたと総括できる。本研究の研究課題は、ヨーロッパ史の再考にあるが、それを日本の人文科学の伝統から問い直すことが重要であり、日本側から、ヨーロッパ史研究の伝統に挑戦するばかりでなく、共同研究によってヨーロッパの研究者の関心を、非ヨーロッパ世界に開かなければならない。この意味で、研究交流、および研究調査を通じて、招聘は国外研究者にも大きな知的成果をもたらした。

以上、本年度の事業は、全体として、計画以上に進展したと総括できる。

4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・著者名について、主著者に「※」印を付してください。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付してください。 ・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付してください。 	
1	篠原琢「「ユダヤ文化」の復興？——ポーランドにおける多文化社会の再構築の試み」、長谷部美佳・受田宏之・青山亨編著『多文化社会読本——多様な世界、多様な日本』東京外国語大学出版会、2016年、56-74頁、査読なし。
2	篠原琢「市民社会」および「ネイション」、南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵責任編集『新しく学ぶ西洋の歴史——アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、131-132, 156-157頁、査読なし。
3	Taku SHINOHARA, “Vytváření národně politické kultury v Čechách v letech 1848-1868: Pokus o přemostění mezi sociální a kulturní historií,” Ph.D. 学位請求論文, カレル大学（プラハ）哲学部, 2015年8月学位授与。
4	篠原琢「「国民の社会」をどのように把握するか」、『日本歴史学協会年報』no. 31、2015年、59-65頁、査読なし。
5	金井光太郎「カリフォルニア大リバーサイド校に見る歴史授業のアクティブ化」、『科学研究費基盤B地域研究に基づく「世界史」教育の実践的研究 報告書』、2016年、94-102頁、査読なし。
6	千葉敏之「寓意の思考——魚から見た中世ヨーロッパ」、近藤和彦編『ヨーロッパ史講義』山川出版社、2015年、32-54頁、査読なし。
7	千葉敏之「神聖ローマ帝国と「世界」」、南塚・秋田・高澤責任編集『新しく学ぶ西洋の歴史——アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、12-13頁、査読なし。
8	相馬保夫「ドイツにおける「外国人労働者」問題と多言語・多文化社会化」、長谷部・受田・青山編『多文化社会読本』東京外国語大学出版会、2016年、20-30頁、査読なし。
9	相馬保夫「離散と抵抗：ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織（16）」『東京外国語大学論集』90号、2015年、57-77頁、査読なし。
10	福嶋千穂『ブレスト教会合同』（ポーランド史叢書1）、群像社、2015年、132頁。
11	鈴木健太「1987年セルビアの党内論争とナショナリズムをめぐる議論——パラチン事件とセルビア党中央委員会第8回総会」、『東欧史研究』（東欧史研究会）第38号、2016年、3-24頁、査読あり。
12	鈴木健太「ミロシェヴィチ政権とナショナリズムの高まり——「統一」の達成とその論理」、柴宜弘・山崎信一編『セルビアを知るための60章』明石書店、78-82頁、2015年、査読なし。
13	鈴木健太「首都ベオグラード——セルビア／南スラヴの都となった要塞の町」、柴・山崎編『セルビアを知るための60章』明石書店、158-162頁、2015年、査読なし。
14	鈴木健太「ジェルダップ峡谷——多彩な顔をもつ最大の国立公園」、柴・山崎編『セルビアを知るための60章』明石書店、196-199頁、2015年、査読なし。

15	鈴木健太「連邦解体とユーゴスラヴィア紛争——民族の自決と「セルビア人問題」」ほか、柴・山崎編『セルビアを知るための60章』明石書店、83-87, 96-101, 132-138, 308-313頁、2015年、査読なし。
16	伊東剛史・後藤はる美編『痛みの文化史——イギリス史のなかの苦痛と共感』東京外国語大学出版会、2016年刊行予定（担当：「プロローグ」、第6章「観察——ダーウィンと生体解剖論争」、「解題」（後藤はる美との共著））。
17	伊東剛史「コラム12：自然と人間」、南塚・秋田・高澤責任編集『新しく学ぶ西洋の歴史——アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、133頁、査読なし。
18	Takashi ITO, “The State and the Popularisation of Science in Victorian Britain: The Scientific and Literary Societies Act of 1843,” <i>Historia Scientiarum</i> 25 (2016), 37pp (2016年3月校了) .
19	伊東剛史「19世紀のロンドン動物学協会からみた動物学の専門分科」、『化学史研究』43巻2号、2016年6月刊行予定。
20	伊東剛史「ダーウィン著『種の起源』」、池田嘉郎他編『名著で読む世界史120』山川出版社、2016年秋刊行予定、309-311頁。
21	伊東剛史「「食べられるために存在しているのだろうか？——今から180年前のロンドン動物園で、はじめてキリンを見た人びとが考えたこと」、『市民ZOOネットワーク ニュースレター』41号、2016年、6-9頁。
22	伊東剛史、「書評：Ian Jared Miller, <i>The nature of the beasts: empire and exhibition at the Tokyo Imperial Zoo</i> , Berkeley: University of California Press, 2013」、『科学史研究』277号、2016年4月（2016年3月校了）。
23	Takashi ITO, “Review: Lisa Uddin, <i>Zoo Renewal: White Flight and the Animal Ghetto</i> , Minneapolis: University of Minnesota Press, 2014”, <i>Humanimalia: A Journal of Human/Animal Interface Studies</i> 7/2 (2016), pp. 154-160.
24	小田原琳「書評：大内裕和・竹信三恵子『全身〇活時代』青土社、2014年」、女性史総合研究会女性史学編集委員会『女性史学年報』25号、2015年、104-107頁、査読なし。
○ 25	Junko KUME, “Escribanos e iluminadores de la frontera cristiana hispana entre los siglos X y XI: la costumbre del retrato” (en castellano), M. F. Ríos (ed.), <i>El mundo de los conquistadores</i> , Madrid, 2015, pp. 839-859, 査読あり.
○ 26	Junko KUME, “Obras de arte en torno a la translatio s. Isidori legionem anno 1063,” G. Rodriguez, G. Coronado Schwindt (eds.), <i>Formas de abordaje del pasado medieval</i> , Mar del Plata, 2015, pp. 40-75, 査読なし.
○ 27	Junko KUME, “Arte cristiano en el Toledo conquistador,” G. Rodriguez, G. Coronado Schwindt (eds.), <i>Formas de abordaje del pasado medieval</i> , Mar del Plata, 2015, pp. 76-96, 査読なし.
28	久米順子「スペイン料理——海と大地と太陽の恵みを食べる」、沼野恭子編『世界を食べよう』東京外国語大学出版会、2015年、176-181頁、査読なし。
29	久米順子（共訳）、三菱一号館美術館、読売新聞社編『プラド美術館展——スペイン宮廷 美への情熱』（展覧会カタログの作品解説・作家解説翻訳）、2015年、179-180, 184-186, 188-189, 199-203, 206-209, 212-218, 221頁。

②学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、主たる発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。 ・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。 	
1	Taku SHINOHARA, "Jewish Presence and Non-presence in the Memory Politics of the Czech Republic," 2015 SRC Winter International & SRC 60th Anniversary Symposium "Between History and Memory: Connecting the Generations at SRC 60," 2015年12月, スラブ・ユーラシア研究センター, 口頭発表, 審査なし.
2	Taku SHINOHARA, "Jewish Existence and Non-existence in the Memory Politics in Central Europe," Polish-Japan Research Seminar "Europe Seen from Abroad" (本研究事業による国際会議), 2016年2月, 国際文化センター(クラクフ), 口頭発表, 審査なし.
3	Taku SHINOHARA, "Canonization of Jewish Memory in Central Europe," The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University "The Violence of Memory and the Memory of Violence" (本研究事業による国際会議), 2016年3月, 中央ヨーロッパ大学(ブダペスト), 口頭発表, 審査なし.
4	Taku SHINOHARA, "Liberalism in German Historiography in Bohemia," 「Constructing a New Concept of European History from Historical Experiences of Borderlands」(本研究事業による国際会議), Part 1: Liberalism Reconsidered in the European Modernity, 2016年3月, 東京外国語大学府中キャンパス(東京), 口頭発表, 審査なし.
5	金井光太朗「アメリカの洗練化とコスモポリタニズム」、科研研究会(課題名「コスモポリタニズムと秩序形成—ブリテン世界における近代的イシュー」)、2015年5月、東洋大学白山キャンパス(東京)、口頭発表、審査なし。
6	Kotaro KANAI, "The Making of a Frontier: Native American Violence and the Violence of the North American Frontier," The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University "The Violence of Memory and the Memory of Violence," 2016年3月, 中央ヨーロッパ大学(ブダペスト), 口頭発表, 審査なし.
7	Yasuo SOMA, "A Comment on Constantin Iordachi "Violence and Memory in the Process of Land Collectivization in Romania, 1949-1962,"" The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University "The Violence of Memory and the Memory of Violence," 2016年3月, 中央ヨーロッパ大学(ブダペスト), 口頭発表, 審査なし.
8	Chiho FUKUSHIMA, "“Rus” between Poland and Russia: Concerning problematics in the Terminology in Japan," Polish-Japan Research Seminar "Europe Seen from Abroad" (本研究事業による国際会議), 2016年2月, 国際文化センター(クラクフ), 口頭発表, 審査なし.
9	Kenta Suzuki, "Rethinking Popular Movements in Socialist Yugoslavia in the Late 1980's: The Role of "Narod" in the Development of Political Participation in Vojvodina and Serbia," Polish-Japan Research Seminar "Europe Seen from Abroad" (本研究事業による国際会議), 2016年2月, 国際文化センター(クラクフ), 口頭発表, 審査なし.
10	Takashi ITO, "Weeping elephants, Charles Darwin and the Vivisection Controversy: A Cultural History of "Embodied Pain" in Victorian Britain," Polish-Japan Research Seminar "Europe Seen from Abroad" (本研究事業による国際会議), 2016年2月, 国際文化センター(クラクフ), 口頭発表, 審査なし.

11	伊東剛史「眠れぬ夜の苦しみ—ダーウィンと生体解剖論争」、第25回イギリス女性史研究会・シンポジウム「女性と動物—動物の苦痛への共感から反生体解剖運動へ」、2015年12月、甲南大学・ネットワークキャンパス東京（東京）、口頭発表。
12	伊東剛史「コスモポリタニズムとエコロジー的近代—19~20世紀転換機のオーストラリアにおける外国人排斥運動と自然保護運動」、科研研究会（課題名「コスモポリタニズムと秩序形成—ブリテン世界における近代的イシュー」）、2015年8月、東洋大学（東京）、口頭発表。
13	伊東剛史「ゾウの涙—ダーウィンの感情研究と生体解剖論争」、近世イギリス史研究会・シンポジウム「近代イギリスにおける痛み」、2015年6月、東洋大学（東京）、口頭発表。
14	伊東剛史「擬人化と馴致—ヴィクトリア期ロンドン動物園の《domesticity》」、歴史学研究会近代史部会例会、2015年4月、早稲田大学（東京）、口頭発表。
15	伊東剛史「黎明期のロンドン動物園」、市民ZOOネットワーク3月セミナー、2016年3月、東京外国語大学（東京）、講演。
16	Takashi ITO, “A Comment on Emese Lafferton “Violation of Mind and Body: The Experimental Culture of Hungarian Psychiatry around 1900,” The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University “The Violence of Memory and the Memory of Violence,” 2016年3月、中央ヨーロッパ大学（ブダペスト）、口頭発表、審査なし。
17	伊東剛史「コメント：川崎明子『ブロンテ小説における病いと看護』（2015）合評会」、医療・文化・社会研究会、2015年6月、慶應義塾大学（東京）、口頭発表。
18	Rin ODAWARA, “Time of the “Realm of Mothers” : Mother-and-Child Discourse in Social Movements in Japan and Historical Time,” Workshop “The Work of Post-War”, 2015年12月、ニューヨーク大学（ニューヨーク）、口頭発表、審査なし。
19	Rin ODAWARA, “Violence against Women and the Racial Discourse in the WWI in Italy,” Workshop “Boundary Demarcation in the 19-20th Centuries in Alpine-Adriatic Borderlands,” 2016年3月、欧州大学院大学（フィレンツェ）、口頭発表、審査なし。
20	Rin ODAWARA, “Violence against Women and the Racial Discourse in the WWI in Italy,” The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University “The Violence of Memory and the Memory of Violence,” 2016年3月、中央ヨーロッパ大学（ブダペスト）、口頭発表、審査なし。
21	Junko KUME, “Obras de arte en torno a la translatio s. Isidori legionem anno 1063,” VI Simposio Internacional “Texto y contextos: diálogos entre Historia, Literatura, Filosofía y Religión”（第6回国際シンポジウム「テキストとコンテキスト—歴史、文学、哲学、宗教間の対話」）、2015年4月、マル・デル・プラタ国立大学（ブエノスアイレス）、口頭発表、審査なし。
22	Junko KUME, “Arte cristiano en el Toledo reconquistado,” Seminario de Posgrado “El taller del historiadores: el abordaje de fuentes medievales”（マル・デル・プラタ国立大学大学院特別セミナー「歴史家たちのアトリエ—中世史料へのアプローチ」）、2015年4月、マル・デル・プラタ国立大学（ブエノスアイレス）、口頭発表、招待。
23	Junko KUME, “Construcción y consolidación de la historia del arte medieval español,” II Coloquio Internacional “La Edad Media vista desde otros horizontes: problemas teóricos y metodológicos”（第2回国際コロキウム「異なる視野から見たヨーロッパ中世—理論と方法論の諸問題」）、2015年4月、マル・デル・プラタ国立大学（ブエノスアイレス）、口頭発表、招待。

24	久米順子「中世スペインのキリスト教美術にみるムスリムとイスラームの表象」、美学会全国大会シンポジウム III「歴史の事実と絵画の真実：文字史料と画像史料をめぐって」、2015 年 10 月、早稲田大学文学学術院（東京）、口頭発表、招待。
25	Junko KUME, “The “Discovery” of Medieval Art and the Formation of National Identities: The Case of 19th Century Catalonia,” Polish-Japan Research Seminar “Europe Seen from Abroad”（本研究事業による国際会議），2016 年 2 月，国際文化センター（クラクフ），口頭発表，審査なし。
25	Junko KUME, “A Comment on Oskana Sarkisova, “Traces: The Memories of State Violence and Domestic Photography. The Novocherkassk Case,” The Second TOKYO-BUDAPEST Workshop, A Joint Program of Tokyo University of Foreign Studies & Central European University “The Violence of Memory and the Memory of Violence,” 2016 年 3 月，中央ヨーロッパ大学（ブダペスト），口頭発表，審査なし。

5. 若手研究者の派遣実績（計画）

【海外派遣実績（計画）】

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
派遣人数	2 人	5 人 (2 人)	3 人 (3 人)	5 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の海外派遣実績】

派遣者②の氏名・職名： 福嶋 千穂・講師

（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

前年度に引き続き「近世ポーランド・リトアニア国家の東部地域における教会合同の影響」を調査課題とし、派遣先である国際文化センター（ポーランド、クラクフ市）を主な研究活動の場とした。クラクフではまた、ヤギェロン大学の図書館と歴史学研究所にも定期的に通うほか、ポーランド教養アカデミーにおいて開催された学会・シンポジウムを聴講し見識を深めた。

ラテン・カトリック文化圏と東方キリスト教圏が重なりあう東中欧の境界的性格を体現する合同教会はガリツィア（ポーランド分割後にオーストリア領となった地域）でとりわけ飛躍的發展を遂げたが、クラクフにはガリツィアの拠点都市であったという土地柄から関連情報の蓄積が大きい。研究対象は厳密には近世（特に17世紀における合同教会の宗派形成と、その過程でのラテン化問題）であるが、クラクフ滞在中には地の利を活かして教会合同の近現代におよぶ長期的影響を考察対象に加えた。

（具体的な成果）

春から夏にかけては、近世ポーランド・リトアニアの教会合同の史料訳と解説から成る『ブレスト教会合同』（群像社、2015年12月29日刊）の執筆に多くの時間を充てたが、ヤギェロン大学歴史学研究所教授ヴォイチェフ・クラフチュク氏の助力を得て、執筆のために参照を要する多くの文献資料にアクセスすることができた。教養アカデミーで開催された学会では、ポーランドや近隣国の研究者（特にウクライナのイホル・スコチリャス、ユーリー・ザズリャク両氏）から、同テーマについての昨今の研究動向をうかがい知ることができた。造形芸術や建築の専門家、専門書を多数擁する国際文化センターは図版資料を調査するのに最適な場所であり、前掲書に使用した図版を選択する際にはミハウ・ヴィシニェフスキ氏はじめ当センター研究員のかたがたに照会を行った。

初秋には国際文化センターで開催された行事、文化財・文化遺産に関する国際フォーラム（3rd Heritage Forum）やサマースクール（European Campus of Excellence）に参加し、歴史的遺産の保存活動や活用に関する最先端の取り組みについて学んだ。こうした機会に得られた情報は、クラクフ滞在中に文献調査や史料収集と並行して行ったカルパチア山地での実地調査をより充実したものとした。ガリツィアでは合同教会の発展とともに数多くの聖堂が建造され、第二次大戦後のポーランドで教区が廃止されていた期間にも、相当数の聖堂が他宗派に転用されることで生き延びることができた。そうした聖堂はクラクフのあるマウオポルスカ県と東隣のポドカルパチエ県の各地に点在し、特にウクライナ、スロヴァキアとの国境地帯であるカルパチア山地には貴重な木造建築を

ふくむ多くが保存されている。それらを訪ねて来歴を調査することで、教区レベルでのミクロな歴史を確認することができた。

冬には、国際文化センターと東京外国語大学との共催による国際セミナー「Europe seen from abroad」（国際文化センター、2016年2月5日）へ向けて準備を行った。当セミナーには報告者の一人として参加し、「ルシ」概念の歴史の変遷とその表記における問題を、ポーランドとロシアにおける用法を比較しつつ検討した。「ルシ」概念は「歴史的ポーランド」とロシアの主張する「ルシ世界」とが重なりせめぎあう境界地域の宗派的アイデンティティ（のちにはナショナル・アイデンティティとも）に関わる問題であるが、報告ではこの地域における教会組織の歴史に焦点を当てて考察した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、ヤツェク・プルフラ教授	33 日	309 日	0 日	342 日

派遣者③の氏名・職名： 鈴木 健太・日本学術振興会特別研究員

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

昨年度3月末に開始された海外派遣のもと、本年度3月中旬まで、派遣先機関で客員研究員として研究活動に従事した。主として、本事業の大枠の主題である新たなヨーロッパ史概念の構築をめざし、ユーゴスラヴィアや東欧の社会主義体制末期の時代に関する個別研究を進めるとともに、本事業の推進にあたっての国際的な研究ネットワークの形成を準備することに取り組んだ。その際、派遣先機関では、定期的に研究者との面会を実施しつつ、また同機関で開催された講演会やセミナーに参加しながら、個別研究への新しい知見や視点を獲得すると同時に、研究交流の進展を図った。

研究活動における個別研究では、20世紀終盤の社会主義体制崩壊におけるナショナリズム(国民主義)の力学について、その直後に再びの境界地域の破壊と断絶が生じたユーゴスラヴィアの経験を中心に再検討する課題を進めた。そしてその検討を通じ、ヨーロッパ(東部)境界地域に共通する社会主義期とその終焉を、ヨーロッパ史の文脈のなかに位置づけることに取り組んだ。その内容は、より具体的に下記の3つに分けられる。対象地域は旧ユーゴスラヴィア地域のなかでもとくにセルビアを扱った。

a) 中東欧の社会主義体制末期の大衆運動とナショナリズム

1989年以降に中東欧諸国で生じた一連の社会主義体制崩壊と当時のユーゴスラヴィアにおける社会変動について、個別事例の分析を踏まえながら、大衆運動とナショナリズムの関係という共通の視座から再検討した。

b) ナショナリズムをめぐる共産党指導部内の議論とその対立

a)を補完する課題として、1980年代末のユーゴスラヴィアにおける大衆運動の展開とナショナリズムの高揚の背景を理解するため、当時の体制を先導した共産党指導部がそうした事態をどのように捉え、またいかに対処したのかについて、セルビアの指導部を事例に考察した。

c) 20世紀ヨーロッパにおける境界地域の諸相

研究対象の地域をより多面的に理解する取り組みとして、20世紀のより長い時代設定のなかで、周辺との境界をなす(なした)都市や名所を取り上げ、それらの歴史的経験

を俯瞰的に捉えながら、境界地域の歴史像に接近することを試みた。

(具体的な成果)

以上の活動を通じて、派遣先の研究者との協力関係を進展させるとともに、個別研究および本事業全体の積極的な展開を図り、一定以上の成果がもたらされた。定期的を実施した研究者との面会では、研究を進める上での有意義な意見交換を行うことができた。なかでも受入研究者であるバラージュ・トレンチェーニ准教授との研究交流では、その民族(国民)横断的に、かつヨーロッパを俯瞰する圧倒的な視座から、個別研究をより広い同時代の文脈、そして事業全体の課題であるヨーロッパ史の概念に位置付ける有益な示唆を得た。またヴラディミール・ペトロヴィチ客員教授とは、世代と専門、対象時代が近いことも幸いし、互いの研究や旧ユーゴスラヴィア地域に関する様々な意見交換を介して研究交流を深めた。本事業全体にとっても、境界地域の「南」からの視座、また現代史における暴力の問題を扱う上で重要な協力関係となったと言える。ペトロヴィチ氏とは、本学と派遣先研究機関とのジョイント・ワークショップの企画に向けて、主題の選定や報告者について何度か研究打ち合わせを行った。その結果、本事業が本年度3月に派遣先機関で共同開催した国際会議「The Violence of Memory and the Memory of Violence」の主題が定まり、企画の着手を見た(氏本人は渡米のためワークショップは不参加)。

このような派遣先でのネットワーク形成、および研究者との協力関係は、上記 a)~c) の個別研究の進展にも寄与した。とりわけ、上述の二氏をはじめとする派遣先の研究者との意見交換を経て、1989年の中東欧諸国の体制変動と同時代のユーゴスラヴィアの事例に関する a) の課題に取り組む意義と重要性を強く再確認した一方、方法論的な批判や「近い」時代を扱うゆえの問題などについての貴重な指摘と助言を得た。a) の研究成果の一部は、報告「Rethinking Popular Movements in Socialist Yugoslavia in the Late 1980's: The Role of "Narod" in the Development of Political Participation in Vojvodina and Serbia」として、本事業が他の海外の連携機関(ポーランド)で開催した国際会議で発表し(Polish-Japan Research Seminar「Europe Seen from Abroad」、本年度2月)、当地の研究者との新たな研究交流を進める機会となった。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ヨーロッパ・ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、歴史学部、バラージュ・トレンチェーニ准教授	8 日	324 日	0 日	332 日
ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、共同セミナー「Europe Seen from Abroad」	0 日	2 日	0 日	2 日

派遣者④の氏名・職名： 小田原 琳・講師

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

平成 27 年 9 月より欧州大学院大学 (EUI) に派遣され、歴史・文明学部のヴィジティング・フェローとして研究活動に携わっている。欧州議会のバックアップによって創設され、多様な文化を背景とする研究者の集まる本研究機関では、つねに研究方法や研究対象を比較史的な視点から検討することが求められ、本プログラムの課題である「境界地域の歴史的経験に重点をおいた新しいヨーロッパ史学概念の構築」の研究には好適の環境である。また、EUI の位置するイタリア・フィレンツェは、国立図書館、国立・公立文書館、各種図書館等、史資料状況もたいへん豊富であり、充実した研究を進めることができている。

(具体的な成果)

本プログラムでの個人的な研究課題は、ヨーロッパの南の境界としての近代イタリアにおける人種とジェンダーをめぐる歴史叙述であり、これに関して、本研究機関に所属するルーシー・ライオル教授、ピーター・ジャドソン教授、パヴェル・コラーシ教授、ボルト・クラビャン教授らと研究上の交流を行っている。2016 年 3 月に EUI で行われた、奥独伊スロヴェニアの境界領域の歴史を扱うワークショップ「Boundary Demarcation and Local Politics in the 19-20th Centuries in Alpine-Adriatic Borderlands」で研究成果の一部を報告し、ライオル教授からはイタリア史における優生学の歴史について重要な示唆を得ることができた。また同 3 月の中央ヨーロッパ大学におけるワークショップ「The Violence of Memory and the Memory of Violence」でも報告の機会を得、ここでは同大のバラージュ・トレンチャーニ教授から、政治的潮流とナショナリズム、ジェンダーの交差についてコメントを得ることができた。またこの二回の報告から、植民地主義史を視野に入れた研究の必要性をますます認識した。2015 年 12 月にニューヨーク大学でおこなった成果発表では、国民構築とジェンダーの関係について、ブレット・ド・バリー教授 (コーネル大学) から貴重なコメントを得ることができた。この間の進捗により、19 世紀末から 20 世紀にかけてヨーロッパ内、ヨーロッパと植民地との関係を「人種」言説による再編成が、近代的ジェンダーを強化し、セクシュアリティを国家が領有し、そのなかでヨーロッパ＝「文明」「白人」的自己意識が構築されてゆく過程であることが、研究の見通しとして明らかになりつつある。EUI におけるワークショップには日本から関連する分野の研究者 (東京外国語大学他所属) も参加し、EUI に所属する研究者と、〈境界〉という概念の国境を超えた再検討、境界地域の住民の、国境再編や戦争にともなう記憶の構築という観点からの比較等、継続的な意見交換を行っていく契機をつくることのできた。

EUI ではヨーロッパ各地から集まった若手の研究者と交流できることにも、研究ネットワークの将来性という観点から大きな意義があると考えられる。その他、EUI が招聘する世界の研究機関に所属するさまざまな研究者と交流し、意見交換できることもたいへん大きな魅力である。シルヴァーナ・パトリアルカ教授 (アメリカ・フォーダム大学) とは EUI でのワークショップで面識を得、その後ニューヨークで再び意見交換をおこなうことができた。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	

ヨーロッパ・イタリア、欧州大学院大学、歴史＝文明学部、パヴェル・コラーシ教授	0日	196日	153日	349日
米国・ニューヨーク、ニューヨーク大学(ワークショップ)およびフォーダム大学(意見交換)	0日	4日	0日	4日
ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、共同セミナー「Europe Seen from Abroad」	0日	2日	0日	2日
ヨーロッパ・ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、国際会議「The Violence of Memory and the Memory of Violence」	0日	4日	0日	4日

派遣者⑤の氏名・職名： 伊東 剛史・講師

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

本研究プロジェクト「境界地域の歴史的経験に重点をおいた新しいヨーロッパ史学概念の構築」において、イギリス近代史を専門とする派遣者の役割は、従来のヨーロッパ史において近代化の理念型を提供してきたイギリスの歴史的経験を、「北西ヨーロッパ島嶼部」という「境界地域」の歴史的経験として再定位し、ヨーロッパ史の見直しに寄与することである。具体的には、派遣先の中央ヨーロッパ大学(CEU)歴史学部において、次の3つの研究活動に従事した。(ア)ヨーロッパ史の文脈における近代イギリス科学の制度化と専門化。(イ)帝国経験・植民地経験のイギリス史への還流。(ウ)多層的ヨーロッパにおける科学拠点の比較史。

(ア)は、ヨーロッパ北西部の「境界地域」に位置付けられるイギリスにおいて、都市化・工業化の進展した19世紀以降に、自然科学がどのように制度化・専門化したのかを、大陸ヨーロッパとの比較を念頭においたうえで明らかにしようとするものである。ヨーロッパ諸地域における科学の制度化・専門化のプロセスは一様ではなく、プロセスに影響を及ぼす要因も様々である。その中で、科学と国家の関係というテーマは、そうした多様性に満ちた歴史的プロセスの比較を可能とする視座を提供する。しかし、イギリスでは国家による科学支援は限定的であると捉えられ、あまり研究が進められてこなかった。そうしたなかで、派遣者は改めて科学団体を支援する法制度に着目し、イギリスにおける科学と国家の関係を再検討し、それにより、イギリスと大陸ヨーロッパとの有意義な比較考察可能にすることを目指した。派遣先のCEUには、サイエンス・スタディーズ部門がある。この部門と歴史学部双方に所属し、オーストリアを中心とする大陸ヨーロッパの精神医療史を研究するDr. Emese Laffertonと学術的交流をはかり、科学史と医学史の視点からヨーロッパ史の見直しを進めた。

(イ)については、イギリスの帝国的展開、つまり非ヨーロッパ世界での活動が、ヨーロッパ世界の科学研究に及ぼした影響を明らかにすることが大きな目標となる。そこ

で、派遣者は 19 世紀イギリスを代表する科学者としてチャールズ・ダーウィンを選び、ダーウィンの帝国経験が彼の科学研究に及ぼした影響を分析した。ダーウィンは、若い頃のビーグル号航海によりイギリス帝国内外のさまざまな地域において経験を積んだだけでなく、その後も、イギリス植民地の行政官吏やインフォーマントを通じて、多くの情報を収集していた。そうした経験や情報が、ヨーロッパ世界に多大な影響を及ぼしたダーウィンの進化論研究に、どのように活用されたのかを明らかにすることが、当面の研究課題となった。一次史料の分析については、出張開始前にすでに終了していたため、派遣機関では、CEU 図書館に所蔵された二次文献を網羅的に調査したうえで、論文執筆に専念した。

(ウ) は、ヨーロッパ各地だけでなく、ヨーロッパ域外にも存在する科学研究拠点から、広範囲の領域を視野に入れ、ヨーロッパ史の見直しを促す試みである。派遣者は、19 世紀にヨーロッパのさまざまな都市に誕生した自然史博物館と動物園に焦点をあてることにした。両者はともに都市の文化的生活を支える重要なアメニティとして設立されただけでなく、それを所有する都市、地域、国家の文明を表象するという役割も担わされた。したがって、いわゆる近代化遺産としての側面があるのである。ブダペストに存在する施設の予備調査を行う一方、日本との比較を念頭に入れた研究構想を描いた。さらに、ドイツでの調査を実施した。また、ブダペストについては、科学史を専攻する CEU の Dr. Katalin Stráner (Assistant Professor) から多くの知見を得た。

(具体的な成果)

(ア) については、国際学術誌に論文を投稿し (4. 研究成果発表状況①-20)、国内学会における報告準備を進めた (同 21)。また、2016 年 3 月に CEU で開催された研究集会において、研究交流を進めてきた Dr. Lafferton の研究報告のディスカッションをつとめ、さらに緊密な協力関係を築くことができた。

(イ) については、日本語での論集の出版準備を進める一方、2016 年 2 月に本プロジェクト提携機関の国際文化センター (クラクフ) で開催された研究集会で口頭報告を行い、そこで得られたフィードバックを活用し、英語での成果公表の準備を開始した (4. 研究成果発表状況①-18、②-14, 15, 17)。これから出版企画書の作成にとりかかるところである。出版社の候補は、感情史をテーマとする叢書を刊行している Oxford University Press か Palgrave である。派生的な成果として、アウトリーチに関する執筆も行った (4. 研究成果発表状況①-22, 23)。

(ウ) については、上野動物園とアメリカの動物園についての学術研究書について書評を執筆したほか (4. 研究成果発表状況①-24, 25)、ミシシッピ大学所属 Dr. Dan Vandersommers からのオファーを受けて、2017 年 1 月開催のアメリカ歴史学協会大会において、「動物園、権力、近代」をテーマとするパネルセッションに参加するための報告要旨を作成した。内容は、20 世紀後半の旭山動物園の発展と日本の消費文化との関係であり、タイトルは、“Penguin Parade and Flying Seals: “The Cult of the Cute” in the Japan’s Northernmost Zoo”。これには、CEU 所属の Marianna Szczygielska (PhD candidate) も参加予定であり、今後の研究協力関係の発展が期待される。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ヨーロッパ・ハンガリー、中央ヨーロッパ				

大学、歴史学部、バラージュ・トレンチェーニィ准教授	0日	175日	150日	325日
ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、共同セミナー「Europe Seen from Abroad」	0日	2日	0日	2日
ヨーロッパ・ドイツ、フランクフルト動物園・ゼンケンベルク博物館・聖書博物館(資料調査)	0日	4日	0日	4日
ヨーロッパ・英国、ブリティッシュ・ライブラリー(資料調査)	0日	1日	0日	1日

派遣者⑥の氏名・職名： 久米 順子・准教授 _____

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

ヨーロッパ中世美術史を専門とする立場から、画像史料を有効に用いつつ、ヨーロッパ境界地域、とりわけ中世地中海地域における歴史的経験の循環を明らかにすることを目標としている。とくに装飾写本と建築の作例を中心に扱い、欧州の南端で「ヨーロッパ」世界が構築されていった過程を見直すことが、本研究計画全体のなかで期待されている。

本年度は、日本で開始した研究成果の一端を国際文化センターでの本研究プロジェクト主催の国際会議で報告したほか、中央ヨーロッパ大学での国際会議にも討論者として参加した。当初は平成28年度からの派遣予定だったが、派遣先である欧州大学院大学での受け入れ態勢が整ったこと、3月17日・18日に中央ヨーロッパ大学で開催された国際会議への出席と絡めてより合理的な欧州滞在が可能となること、校務等の調整ができたことなどから、3月7日にイタリアへ渡航し、欧州大学院大学にて Research Fellow として研究を開始した。

(具体的な成果)

19世紀のイベリア半島でどこよりも早く産業革命に成功し、ブルジョワ層による都市開発が進んだカタルーニャで、中世文化がどのように「再発見」され、ナショナリズムの形成過程に取り込まれていったのかという歴史と美術史・文化史両方にまたがる問題を国際文化センターの国際会議で発表した。他の出席者から他のヨーロッパ辺境地域でも同様の現象が起こっていたというコメントを得たことで、比較史的な視座からの研究を志す本プロジェクトが実り豊かな結果をもたらし得るという見通しが強化された。

3月の中央ヨーロッパ大学の国際会議では Oskana Sarkisova 氏の発表のコメントーターを務めた。ソ連時代の都市の記憶を写真という画像史料により解き明かそうとする氏の研究方法は、他の地域や時代にも適用可能である。時代や地域を異にする専門家とのコンタクトによって、新たな研究方法の可能性が広がることを実感した。

派遣先の欧州大学院大学では、現在、受入研究者であるコラーシ教授との面会や同大学で開催されるワークショップへの出席等を通して今後1年間の研究活動の基盤づくり

を進めているところである。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ヨーロッパ・イタリア、欧州大学院大学、 歴史＝文明学部、パヴェル・コラーシ教授	0 日	21 日	335 日	356 日
ヨーロッパ・ハンガリー、中央ヨーロッパ 大学、国際会議「The Violence of Memory and the Memory of Violence」	0 日	4 日	0 日	4 日

※本年度の派遣者毎に作成すること。

6. 研究者の招へい実績（計画）

【招へい実績（計画）】

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
招へい人数	2 人	8 人 (2 人)	7 人 (3 人)	12 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の招へい実績】

招へい者①の氏名・職名：バラージュ・トレンチャーニイ・准教授

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

バラージュ・トレンチャーニイ准教授は、ヨーロッパの境界地域のネーション形成、ナショナリズム研究について指導的な研究者である。ヨーロッパの 16 言語に通じ、各国の史学史に詳しく、いくつもの共同研究を通じて、研究ネットワークを構築している。本研究では、主に理論的な諸問題、および比較史の方法の問題を中心に担当する。

（具体的な成果）

トレンチャーニイ准教授は 3 月 25 日に本学で行われた国際会議で「中・東欧における自由主義のトランスナショナルな歴史に向けて」と題する報告を行った。この報告は、自由主義思想によって構築されたヨーロッパ史の規範を批判的に検討するための枠組みを提供するものとなった。また、中央ヨーロッパ大学で行われた国際会議ではコメンテータとして比較史の可能性を示した。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー／篠原琢（東京外国語大学）	0 日	10 日	14 日	24 日

招へい者②の氏名・職名：パヴェル・コラーシ・教授

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

ヨーロッパ現代史、とりわけ冷戦期の歴史を東西にまたがって叙述する枠組みの構想を方法論的、概念的に発展させる中軸となる。また、欧州大学院大学と東京外国語大学との研究者循環に中心的役割を果たす。

（具体的な成果）

東京外国語大学において行われた国際会議において、パヴェル・コラーシ氏の報告は、ヨーロッパ史概念から「東」がもっとも疎外された冷戦期について、死刑制度に注目しながら、国家暴力の行使という観点から考えた場合の、「東」を有機的に包括したヨーロッパ史叙述の可能性を提起した。これらの報告は、本プロジェクトを進める上で、本質的に重要な貢献となった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
欧州大学院大学、歴史＝文明学部、イタリア／篠原琢（東京外国語大学）	5 日	1 日	10 日	16 日

招へい者⑥の氏名・職名： マティアス・リードル・教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

ヨーロッパ中世、近世におけるヨーロッパ史概念を政治思想史研究に即して解明する。中央ヨーロッパ大学と東京外国語大学との研究者循環に中心的役割を果たす。

(具体的な成果)

東京外国語大学において行われた国際会議において、マティアス・リードル氏の報告は、中近世の政治思想史に即して、ヨーロッパ史における「西」の意味づけを明らかにした。現実には13世紀までビザンツ世界は、西欧に対して文明的・知的に圧倒的な優位に立っていたにも関わらず、宗教的普遍性を代弁する帝國的政体が、その領域的限定性(「西」)を普遍性に投影したのである。報告は今日まで続くヨーロッパ概念の構築の持続性を示した。

2016年3月に中央ヨーロッパ大学歴史学部で行われた本事業主催の国際会議の計画・組織・実施に中心的役割を果たした。

招へい元(機関名、部局名、国名)及び 日本側受入研究者(機関名)	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー／篠原琢(東京外国語大学)	6日	2日	10日	18日

招へい者⑦の氏名・職名： ミハウ・ヴィシュニェフスキ・研究員

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

ミハウ・ヴィシュニェフスキ研究員は、中央ヨーロッパにおける文化財保全、都市景観の保全の歴史を専門としており、国際文化センターでは、国際交流を担当している。平成27年度は、文化財保全からヨーロッパの歴史意識を検討することを研究の一つの柱としており、モニカ・リディゲル氏、ウカシュ・ガルセク氏とともに、この課題について大きな貢献をなすものと期待される。ヴィシュニェフスキ博士は、本研究事業の前提となる「国際移動セミナー」の企画・運営にあたって、国際文化センター側を代表しており、本事業でも実質的なコンタクト・パーソンの役割を果たしている。

(具体的な成果)

3月に本学で行われた国際会議では、「リヴィウのアルメニア使徒教会」と題する報告を行い、アルメニア使徒教会の修復の実例を通じて、都市景観における記憶の問題、諸文化の衝突の問題について議論した。また京都大学、および本学における国際セミナーで報告を行い、討論に応じた。

2016年2月に国際文化センターで行われた本事業主催の国際会議の計画・組織・実施に中心的役割を果たした。

招へい元(機関名、部局名、国名)及び 日本側受入研究者(機関名)	招へい期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
国際文化センター、ポーランド／篠原琢(東京外国語大学)	0日	15日	0日	15日

招へい者⑧の氏名・職名： マーシャ・シーフェルト・准教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

マーシャ・シーフェルト准教授は、ロシアにおける情報技術史を専門としており、中央ヨーロッパ大学で本学の巽由樹子講師と共同研究を行った。

(具体的な成果)

巽講師との共同研究の成果を2015年8月に行われた国際中欧・東欧研究協議会で、パネルを組織し、報告した。また篠原とともに北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで共同研究の成果を報告するセミナーを開催した。これらは本研究プロジェクトが目指す研究者の国際連携の成果を具体的に示すものとなった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー／篠原琢（東京外国語大学）	0 日	13 日	0 日	13 日

招へい者⑨の氏名・職名： コンスタンティン・ヨルダッキ・教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

コンスタンティン・ヨルダッキ教授は、戦間期から第二次世界大戦時のヨーロッパ、とりわけ東欧の右派急進主義運動／体制、および社会主義期の農業集団化の諸問題を専門としている。本プロジェクトは、ヨーロッパ史が経験した破局を、その境界地域から再考することを重要な課題とするが、この課題にとって右派急進主義運動の展開とその体制の成立の分析は不可欠である。また、社会主義の歴史をヨーロッパの20世紀史に有機的に組み込むことも重要である。

(具体的な成果)

ヨルダッキ教授は、本学で行われた国際セミナーにおいて「歴史的地域の探求：象徴地理学から批判的地政学へ」と題する報告を行い、中央ヨーロッパ概念について批判的考察を行い、本事業が目的とするヨーロッパ史概念の再検討に大きく貢献した。神戸大学で行われたセミナーでは「戦間期における宗教・メシアニズム的ナショナリズム・ファシズム」と題する報告を行い、全ヨーロッパ的な右派急進主義運動共通の特色について検討した。また、3月に中央ヨーロッパ大学で行われた国際会議では、「ルーマニア農業集団化における暴力と記憶」という報告で、社会主義期についての集合的記憶の問題を論じた。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー／篠原琢（東京外国語大学）	0 日	21 日	0 日	21 日

招へい者⑩の氏名・職名： モニカ・リディゲル・主任キュレーター

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

リディゲル氏は、国際文化研究所美術館の主任キュレーターの任にあり、現代ヨーロッパ史の美術的表象について研究を推進している。国際共同研究においては、美術的表象を通じた記憶の問題を扱う。

(具体的な成果)

3月に本学で行われた会議では、「歴史を再考する：ポーランド現代美術における集合的記憶と個人的記憶」という題目で報告を行ったほか、2月に国際文化センターで行われた国際会議では、「ポーランド現代彫刻における建築的次元」という報告を行った。それぞれ、現代美術を通じて、歴史意識、とくに現代史の経験に対する記憶の問題を扱った。ほかに、京都大学、および本学で国際ワークショップを行い、報告を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
国際文化センター、ポーランド／篠原琢 (東京外国語大学)	0 日	15 日	0 日	15 日

招へい者⑪の氏名・職名： ウカシュ・ガルセク・研究員

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

ガルセク氏は、19世紀、20世紀ヨーロッパ政治思想を美術史・建築史と関連させながら研究を進める点で、非常にユニークな研究者であり、リディゲル研究員とともに、学問領域を横断して、ヨーロッパ史概念の批判的検討に貢献している。

(具体的な成果)

3月に本学で行われた国際会議では「スコピエ：未完の都市」と題する報告を、また2月に国際文化センターで行われた国際会議では「困難なモダニズム：カトヴィツェの場合」という報告を行った。それぞれ、スコピエ（マケドニアの首都）、カトヴィツェ（ポーランドの工業都市）という特定の空間を取り上げることにより、社会主義の過去が建築・都市計画のモダニズムを通じて、どのように現代の都市空間に反映しているか論じたものであるが、美術史・建築史と歴史学とを横断して、本事業の研究活動に類例のない貢献を行った。ほかに、京都大学、および本学で国際ワークショップを行い、報告を行った。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
国際文化センター、ポーランド／篠原琢 (東京外国語大学)	0 日	15 日	0 日	15 日

※本年度の招へい者毎に作成すること。

7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

--

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。